
ここにいる

京(みやこ)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

じにいる

【Zマーク】

Z7872D

【作者名】

京
みやこ

【あらすじ】

あと一步で楽になれる筈の私はどうしてもその一歩が踏み出せない。そんな私を救ってくれたのは意外な人だった。上・下の一部構成。

私の命の恩人はホームレスだ。

言い方は悪いが、社会からつまはじきにされているホームレスに助けられるなんて一体どういう人生を送ってきたんだ?というような人生を私は過ごしてきた。肌はニキビだらけで体も太い。髪の毛も剛毛の為ボサボサで、性格も暗い私は昔から^{いじ}虐めの餌食だった。男の子からは「^のバス」と罵られ、女の子からは「終わってる」と言われ続けた。

これからも未来もきっといいことなんかない。だからもう人生にピリオドを打とうと私は今歩道橋の上から飛び降りようとしている。「はあー。」

その歩道橋の上で私は深呼吸をした。

死のうとは今まで何回も思つたことがある。その証拠として手首には切り傷が数本あるが、こんなものじゃ死ねなかつた。だから飛び降りるのだ。遺書もバツチリ書いてきたし、その方がきっと私を虐めてきた人達に何か影響があるだろう。

それなのに

怖いと思つてしまふなんて。

ライトをつけて走る車をぼけつと眺めながら、私はどうしても歩道橋から飛び降りることが出来ないでいた。何も考えずに飛べば良かつたのに、自分が地面に叩きつけられる瞬間を想像してしまい手すりを飛び越えることが出来ないでいる。

あと一步踏み出せば楽になれるのに。
早く踏み出せ。

そう何回も思いながら私はしばらくの時間をそこで過ごしていた。

「死ぬんなら、今夜は俺に抱かれない？」

立ち尽くしたままどれほどの時間が経つたのだろう。私は突然声を掛けられ、声がする方を振り向くとヨレヨレでボロボロな男の人がそこに居た。

「・・・・・」

嫌だ。そりや彼氏とか恋人の行為とか憧れたことあるけど、こんな人は嫌だ。

なんて失礼なことを思いながら私はようやく手すりに右足を掛けた。今やっと飛び降りることが出来そうです。

「まだ若いのに〜、もつたいない。」

その男の人は私の行為を止めようとするでもなく、かといって促すわけでもなくそこに座り込んだ。

「俺なんかまだ三十代なのにさ、このザマよ。」

酔っ払っているのか、その男の人は体をフラフラ揺らしながら勝手に話し始める。

「できちやつた婚して、死ぬ程働いてたのに子どもが飛び出してきて避けきれなくて・・・殺人者になっちゃうわ子どもも連れてかみさんには逃げられるわ、どうよこの人生。」

今まで虐められた私が哀れに思う話なんて、世の中にはどれだけあるのだろう戦争や難民の話だって所詮は他の国の話、実感がイマイチ湧かなくて一瞬の同情だけで終わってしまう。

だけど今、私は初めて会った人の話で心がえぐられたように悲しくなっている。内容を信じたのは男の人の瞳が絶望を知っている瞳だからだ。絶望を味わった人だけがわかる、瞳。

私は手すりに掛けた右足を下ろした。決して死ぬのを止めたわけじゃない。ただ足が痺ってきたからだ。この男の人の話をもう少し聞いたらここから飛び降りる。絶対に。

そう心に誓いながら私は男の人の横に座った。

「原因は年齢的に虐め？」

私は頷いたりしなかつたが、男の人にはわかりきつているようだつた。

「抱かれる喜びも知らずに死ぬなんて勿体ねえよ。」

「あなたには関係ないじゃないですか。」

「ふざけているような男の人に、私は冷たく言葉を返した。

「大人からしたら大した問題じゃなくても、私には大きいんです。友達も居なくて、彼氏すらできたこともなくて、何も楽しくなんかない。何もいいことなんかない。これ以上生きててもいいことなんか、絶対にない。」

息継ぎもせずに一気に言うと、私の目から涙がこぼれてきた。

「何で今更？ 虐められ続けた私はもう、辛さで泣くということなんてとつぐの昔に止めたはずなのに。」

「ああ、そうか。一気に言葉を吐き出したから体が酸欠になつたんだ。だから酸素を求めて勝手に涙が出てきたのだ。辛さとか言つ馬鹿馬鹿しい感情のせいなんかではない。」はす。

「死ぬ勇氣があるなら何でも出来るさ。虐め返す事だって、綺麗になつて見返してやる事だって。」

「そんな訳ない。」

今まで虐めてきた人に反抗したことがあった。でも、虐めはもつとひどくなつた。

綺麗になつてやろう、つて思ったことだつてある。でも、結局ダメイエットとか上手くいかなくて挫折した。

私は何も出来ない。

もう死ぬことでしか救われないので。

「おじさんもこつから飛び降りようとしたけど、怖くて無理だつたな。地面に叩きつけられる瞬間を想像しちまつてさ。」

自分と同じ事を想像した人が居ることにビックリして私は涙が止まつてしまつた。

「その時、今の仲間に声を掛けられてさ。」じつから見える公園に今も居るんだけど、なんかそのまま踏みとどまつちまつて結局今に至

るのや。」

男の人気が歩道橋の手すりに背もたれると、その格好にはどう考えても不釣合いなネットクレスの青い石が月明かりに反応してきらつと光った。

「今日はもう帰りな。泣く元気があるなら、生きていく元気がある証拠だよ。」

一度は止まつた筈の涙がまたこぼれてきた。それと同時に嗚咽おえつまでし始めた私の頭をその男の人は優しく撫なでで始める。どうしてこの男の人は私に優しくしてくれるのだろう。見た目も性格も、全然可愛くない私に優しくする理由なんて見付からない。目の前で死なれたら気持ち悪いだけ？今暮らしているという公園の近くで事件が起こつて欲しくないだけ？それともただ女に優しいだけ？

わからない。でも、私はこの男の人が言う通り家に帰ろうと思つた。生きたいなんて今は思えないけど、確かに死ぬ勇氣があるならなんだつて出来るかもしれない。

「よければ、公園にも遊びに来てね。」

撫でながら男の人が行つた言葉に、私は泣きながら頭の中で考えた。この男の人が居る公園におにぎりを作つて持つて行き、一緒に食べている図。

ありえない・・・

「ふつ

？」

「あはははは。何？何するの？公園に遊びに来てつて。」

おにぎりを食べるだけでなく、この男の人と砂場で遊んだりブランコに乗つたりすることまで考えると私はどうしようもなくおかしくなつた。

「ホームレスをなめちゃいかんよ。公園を熟知しているからかくれ

んぼは得意だ。」

「え？普段仲間とかくれんぼしてるの？あはは、変～。」

「この男の人と同じ様な人達が数人で真剣にかくれんぼをしている姿を考えて私はまたおかしくなつて吹きだした。」

「泣いたり笑つたり、忙しいお嬢さんだな。」

私はその一言にハツとした。本當だ、今かなり笑つていた。「腹の底から笑う元氣があるなら、泣く時同様生きていく元氣がある証拠。」

「・・・・・うん。」

この男の人が言うとかなり説得力がある。きっとここに同じ気持ちになつたことがあるからだ。

私はよろよろと立ち上がった。

「一つだけ、聞いてもいい？」

「何？」

「そのネックレス・・・」

「これ？昔かみさんにあげたヤツ。指輪嫌いだつたからさ、結婚指輪の変わりにこれあげたんだ。家出て行く時に置いてってさ。」

懐かしそうな目で男の人が石を触る。きっとまだ奥さんのことを想つているのだろう。

「何か捨てれなくて。」

私は何と言葉を返していいのかわからず、ただ困惑の表情で男人を眺めた。それに気付くと男の人も立ち上がり、私の頭をもう一度撫でた。

「気をつけて、お帰り。」

私はまた泣きそうになつて無言で回れ右をし、歩き始めた。だが、数歩歩いて立ち止まつた。

「ありがとう。」

少し振り返つて小さい声でボソッと呟くように言ったが、ちゃんと男の人の耳に届いたらしく男の人はニッコリと笑つた。

「またね。」

男の人が笑顔で、私に挨拶をしてくれた。私はそれに返事をすることなく、また無言で歩き始める。

また会う日が来るのだろうか。公園に居るといつても、いつもとは限らない。より住みやすい住処すみかがあればきっとそっちに移動してしまうのだろうし、狭いようで広いこの世界で今日のように偶然会うということは皆無に等しいのではないか。

だけど私はこの言葉が嬉しかった。友達も彼氏も居ない私に“またね”という言葉を掛けてくれる人なんて居ない。だから、すぐ嬉しかったんだ。

これから何をしよう。どうやって生きよう。

とりあえず疲れたから思いつきり眠ろうかな。それから考えればいいかな。

帰り道、一人でとぼとぼ歩きながら私はこれからの自分を考えた。明るい未来なんてやっぱり考えられないけど、とりあえず生きていこうと思う。

おじさん。私、おじさんのこと忘れないよ。

怖いだけじゃなく、私が歩道橋から飛び降りられなかつたのは止めてくれる誰かを待っていた。絶望を感じながら、こんな私でも生きていいのだと言わることを心のどこかで期待していたのだ。

それをしてくれた私の命の恩人。
絶対に忘れない。

「話聞いてくれてありがとう。」

「どういたしまして。」

私は友達の愚痴を明け方まで聞いた後、バイト先へと向かい始める。歩道橋から飛び降りようとした日からもう二年の月日が経つていた。

あれからとりあえず家に帰った私はそれから半日以上眠り、起きてから必死にそれからのことを考えた。

コツ コツ コツ

バイト先に行くまでに例の歩道橋を通らなくてはいけない。階段を上りながら私はあの日からのことを鮮明に思い出す。

コツ コツ コツ

起きてからまたまつけたテレビで整形美人の特別番組が流れたり、単純な私は自分に残された道がもうこれしかないと思つた。しかし先立つもの、つまりお金がなければ整形できない。だから私は無我夢中で働いた。学校も辞め朝から晩まで働き通した。すると私にどんどん変化が訪れた。

家に帰るとすぐに眠っていたので夜中の間食がなくなり、そのおかげからか顔のニキビが減り体重も下がり始めた。同じ場所で働いているお洒落な大学生の人に感化されてファッショングルや化粧なんかにも興味を持ち始めた。

そして、働いてお金を稼ぐという大変さがわかつた私は折り合いの悪かった両親に感謝の気持ちを持ち始めた。

「あれからもう三年か。」

あの日と同じように歩道橋の真ん中で立ち止まり、道路を走っている車を見下ろしながら溜息をついた。

「お姉さん一人？お茶でもいかない？」

「ごめんなさい。人と待ち合わせしているので。」

突然若い男の人に声を掛けられたが私は嘘でやんわりと断つた。男の人はあっさりと引き下がり、今度は階段ですれ違う女人に声を掛けている。とりあえず誰か引っかかるればラッキーという感覚なのだろう。

私の肌にはまだニキビも、そしてニキビ跡もあるが化粧をすればそれ程目立たず、細身とは言えないが服のサイズも小さくなつた。憧れていた友達や、実は彼氏なんかもできた。さつきみたいに声を掛けられることも、ごくたまに。

整形することなくありのままの私だ。世界レベルで見ると決してランクが高い訳ではないのだろうが、外見が変わった自信からかもう整形しようとは思わなくなつた。

「不満なんてない筈なのになあ。」

私はまた溜息をついて歩道橋の手すりに手を掛けた。

昔あれ程憧れていた現実を手に入れた筈の私は、心のどこかにぽつかりと穴が開いているようだった。

「何が足りないんだろう。」

まだ何かを望んでいるのだろうか。

どうして人間はこうも欲深いのだろうか。一つ願い事が叶うと

またそれ以上のものを求めてしまう。

チャツチャラララー

携帯電話を開くとメールが一件届いていた。さつき話を聞いていた友達からだ。

『いつも話聞いてくれてありがとうね。今思い出したんだけど、借りてたDVD返し損ねてたつ。また次のバイトの時には絶対に返す

ね！では今からバイト頑張ってね。』

可愛い絵文字がたくさん使われたメールにすぐに返信すると、私は心の引っ掛けりが何か少しあわかつた気がした。

“いつも”

この友達が言つ“いつも”とは私たちが出会つてからだ。体重はまだそれ程減つてはいない頃だが、心が変わり始めてからの私。自殺しようとしていた日から前の私じゃない。

友達も彼氏も、いくたまに声を掛けてくる人の誰もが以前の私を知らない。

もし、知つてしまつたら？一キビだけで、今よりずっと太つて性格も後ろ向きで、虐められてた頃の私を知つても友達の今まで居てくれるのだろうか。恋人の今まで居させてくれるのだろうか。

「つて何後ろ向きなこと考えてんだろ。」

中身はそう変わつていないらしい。何があると私はすぐにつじうじしてしまう。

「バイト、遅れちゃう。」

とり憑かれたかのようにそこに佇んでいた私はようやく手すりから離れて歩き始める。

コツ

「お嬢さん、もう行つちゃうの？」

足を一步前に踏み出した瞬間にまた声を掛けられた。今まで一日に一回ナンパされたことはないのに。新記録か！？

と、一瞬思ったがそんな考えはすぐに蹴散らし勢いよく私は振り向いた。聞き覚えのある声だつたからだ。

「いい女になつたなあ。」

振り向いた先に居たのは私が思つた通りの人だった。

私は怖かった。やつと掴んだこの幸せをいつか失つてしまつので

はないかと。だから昔の私を知られたくないかった。

でも、本当はありのままの私を受け入れて欲しい。認めて欲しい。

心のどこかでずっとやつ思っていた。

「よくここまで頑張ったな。」

おじさんと言葉に、私は視界が滲んできた。

昔の私を知っている人がここにいる。
努力を褒められる為に今まで頑張ってきたんじゃない。だけど、
その一言がたまらなく嬉しい。

「おじさん。」

「ん？」

私は満面の笑みでおじさんの顔を見た。

私ね、今生きてて良かったと思ってる。おじさんもあの時そう思つてたんだしあう? 家がなくても、死ななくて良かったって。そして私もきっとそう思うことがわかつてたんだしあう?

過去を乗り越えて、今の私がここにいる。
それだけでもう充分に幸せなのだ。

何も言わない笑顔の私は傍から見ればかなり怪しいだろう。でもおじさんは私の次の言葉を待ってくれている。

おじさんの首元で、男の人には不釣合いなネックレスの青い石が朝日に反射してきらつと光った。

bright daydream (後書き)

お粗末さまでした。

再会したおじさんがさらばボロボロでヨレヨレになっていたか、全然変わつていなかつたか、それとも・・皆さん各自で想像してみて下さいね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7872d/>

ここにいる

2010年10月8日15時15分発行